

## 第6号

発行年月：2012年10月



## 日本医療ソーシャルワーク学会ニュース

## 目次

- |                  |              |                    |
|------------------|--------------|--------------------|
| 1. 副学会長あいさつ      | 4. 学会全体の感想   | 7. 次年度大会開催地からのあいさつ |
| 2. 広島大会長あいさつ     | 5. 分科会報告     | 8. 書籍紹介            |
| 3. 広島大会実行委員長あいさつ | 6. ワークショップ報告 | 9. 事務局からのお知らせ      |

## 1. 副学会長あいさつ

「いよいよ活動の時期が来た  
—第3回日本医療ソーシャルワーク学会を終えて—」

副学会長 竹内 一夫(兵庫大学)

7月7日、8日の両日、広島での学会に多くの方がご参加いただき、また広島地区の学会会員の方々の多大なご努力により、全プログラムを有意義な学びを持って終了できたことを深く感謝申し上げます。我々医療ソーシャルワーカーの今後担うべき課題は、そのおかれた状況がいかにあれ、患者・家族の悩みや苦しみに寄り添い手を差し伸べ続けていくことなのだ、改めて思いを深めた2日間でした。

今回は「医療ソーシャルワーカーの展望と確信」というテーマで大会を開かせていただきました。特別講演ではドイツにおけるクリニカルソーシャルワークの取り組みについてNWRカトリック大学のシーラー・ハインリッヒ教授から報告がありました。医療ソーシャルワーカーが認知症の患者と家族へのケアマネジャーとして、総合的な支援を組み、家族へのカウンセリングや心理的な指導・訓練をも行うという興味深い現状でした。NASWが医療関連施設で働くソーシャルワーカーの業務遂行のガイドラインとして提示している内容と相通じるものがあります。患者の医学的な状況の理解と対人援助の幅広い知識と技術が必要と考える我が学会の患者理解と支援へのスタンスと同じものを確認しました。

またリレー講演では、北里大学病院の小野沢 滋先生、江南厚生病院の野田智子先生、市立岸和田市民病院の和田光徳先生の3人の講師から、地域医療連携の中に医療ソーシャルワーカーが存在し、連携に介在していくことで、いかに医療にとって、患者にとって、家族にとって、地域にとって有効な支援が成り立つのかを、そしてそのことが患者、家族の現実への対応を支え、主体的に選択し、主体的に生きていく、患者、家族の生を支えていくことになるのかを、それぞれの言葉を通して、紡ぎあげていただけました。特別講演、リレ

ー講演の先生方の実践から、わが国の医療ソーシャルワーカーの明日への希望を改めて持たせていただけたと思います。

本学会誌にも少し書かせていただきましたが、今医療と福祉は地域をキーワードに、地域での両者の連携の重要性を中心に据えことを進めて行こうとしています。

今回の介護保険、医療保険の同時改定では、いくつかの施設基準に、社会福祉士の配置が書き込まれました。その内容を詳しく見ると、今回の改定には我々MSWが十分にその実力を発揮できる業務内容が新設されたことが判ります。それは「患者や家族への相談支援体制の充実」（詳細な入院診療計画を作成し、入院7日以内に退院困難患者の抽出を行い、退院困難患者への調整を行うことが内容の中核）です。これらのためには患者や家族の相談に的確に乗り、それらの情報をもとに、効果的な退院調整を行える部門が必要となります。

今回の改定の目指すところは、さきの「社会保障改革に関する集中検討会議」の2025年度の将来像をにらんだものであり、「施設から地域へ・医療から介護へ」という大きな流れに沿う支援がここでは求められるということがはっきりしました。詳細な入院診療計画には退院を見据えて効率的効果的に入院期間を活用することが求められ、そのためには患者の詳細な家族関係や持てる能力、生活歴が不可欠な情報であり、MSWは自ら集めたこれらの情報と医療情報を併せ持ち、患者家族の問題を全人的なレベルで整理し、療養生活の支援や、退院に向



けての支援を行っていく必要が出てきます。このポイントに、まさにMSWがこれまで培ってきた入・退院支援でのノウハウを持ち込むことができる根拠があるといえるのです。

大会が終わって約2カ月が過ぎた8月27日、「在宅医療に地域責任者」（日経新聞朝）という見出しがトップを飾りました。厚労省は地域連携拠点を100か所整備し地域での医療と介護のサービスを一体的に提供するとともに、各地域に地域責任者（医師、看護師、ケアマネジャー、医療ソーシャルワーカーを登用）を置き、情報交換が不足しがちな医療と介護の連携を強化することを目的に、利用者の住み慣れた地域で

の24時間の医療、介護のケアの提供を行い、地域の医療と福祉の効率的、効果的な提供をはかる実働体制の設立と稼働を開始し、人材の確保を行うことになっていると報じました。

機はいよいよ熟したという感じです。我々の専門性を持って地域にアウトリーチし、新たな専門職としての職域を確保していこうではありませんか。医療ソーシャルワーカーの明日を信じて。

最後になりましたが、わたくしは身の丈をわきまえず、今年度から副会長に就任いたしました。微力ながら頑張りますので、よろしくご指導くださいますようお願いいたします。

## 2. 広島大会長あいさつ

### 第3回日本医療ソーシャルワーク学会広島大会を終えて

広島大会大会長 徳富 和恵(安芸太田病院)

会員の皆様をはじめ大会に関心を寄せてくださった172名の参加者を迎え、7月7日～8日に広島大会を開催し、全日程を予定通り終えることができました。

大会テーマを「医療ソーシャルワーカーの展望と確信～明日に向かってズームイン～」とし準備してまいりました。ご参加いただいた皆様が、このテーマのような心持ちで帰途についていただけたなら幸いです。

当日のごあいさつでも述べたことですが、2025年を一つの到達点に医療と介護を中心として社会保障制度の在り方が検討され、セーフティネットであるべき生活保護制度にさえ大鉦が振るわれかねない状況です。真に援助を必要としている人に届く社会保障制度になるか、届かないものになってしまうか、これからも一つ一つの実践をもとに示していく必要があります。

政局や経済動向の不安定さの中、眼前の医療や福祉のシステムも大きく変貌し、リレー講演のテーマにしました在宅医

療のかたちも変わりつつあります。患者さんがシステムに振り回され、ともすれば私たちもそれに乗ってしまうことで業務は終えてしまい、MSWとしてのありようは適切だったかと自問自答を繰り返すこともある

でしょう。そのような毎日の中で、MSWが確信をもって継続した活動をするこそが患者さんをはじめとし社会への貢献になるということを再確認し、力を受けて頂いたと思います。

運営に際しましては協力員の皆様をはじめ、各方面からのご支援をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。



## 3. 広島大会実行委員長あいさつ

### メッセージを受けとめていただいて

広島大会実行委員長 森崎 千晴(廿日市市障がい福祉相談センターきらりあ)

兵庫からバトンを引き継ぎ、今年は広島での大会開催。大会前日の激しい雷雨、大会当日朝の大雨洪水警報。みなさん無事会場に辿り着いてくださるだろうか…そんな不安いっぱいの広島大会の幕開けでしたが、大会参加者は170名を超え、熱意あふれる2日間を送ることができました。講師のみなさま、ご参加くださったみなさま、本当にありがとうございました。

1日目の基調講演「ドイツの医療ソーシャルワークの実情」、リレー講演「在宅医療の広がり」と展望」、2日目の実践報告、ワークショップ、どれもが中身の濃い充実したものとなりま



した。アンケートでは、「大変勉強になりました」「自分の仕事内容をふりかえることができました」「全国各地のMSWのみなさんとお会いでき、またどのような思いを抱え働いておられるかを認識でき、これからの目標が見つかりました。日々の業務に持ち帰り、さらに頑張ります」といった数々のご感想をいただきました。まさに私たちが今回掲げた大会テーマ「医療ソーシャルワーカーの展望と確信～明日に向かってズームイン～」そのもののコメントです。全国各地の同志が集い、学びあい、そして明日からの自分に目標とエールを送ろう！元気がいっぱい！などお届けしたかったメッセージをしっかり受けとめていただいたそんな気持ちです。現実、世の中の情勢変化の激しい中、私たち医療ソーシャルワーカーが抱える課題は山積みです。しかし、これからも、先輩から学び、同僚と分かち合い、後輩につなぎながら、先を見据え元気で地道な取り組みを続けて行きたいと

考えます。

昨年末に大会実行委員会を立ち上げ、「みんなで「広島」を感じていただける大会づくりをしよう！」とがんばってまいりました。広島平和記念公園内での大会開催、広島名物（お好み焼き、瀬戸内の魚、地酒）が盛りだくさんの懇親会、広島方言のご紹介などなど、いかがだったでしょうか？広島観光はされましたか？少人数体制の実行委員会で、みなさまには多々ご迷惑をおかけしたことと思います。大会運営は、本音を言えばかなり大変でした。が、今は「やってよかった！」と心から思っています。みなさんからたくさんの元気をいただきました。感謝の気持ちいっぱいです。明日からまたがんばります。今回大会をしっかりと心に刻み…「広島」から次回大会開催地「岩手」へバトンをつなぎます。

みなさん、また来年もお会いしましょう。

## 4. 学会全体の感想

### 必要なものを生み出す力、働きかける力を学ぶ

今回の広島大会では、リレー講演、分科会など全国各地で取り組まれているSWの実践を聞くことができました。特に、実践報告では地域への働きかけや社会資源の開発などアウトリーチを行っているSWの実践を聞くことができました。その実践からSWの役割を改めて考えるきっかけとなりました。私たちの仕事の中心は患者さんや利用者さんであり、そのニーズにどう対応することができるか、その為には何が必要なのか、そして必要なものを生み出す力、働きかける力をSWが持

#### 笹原 義昭(NPO法人ウイングかべ)

つことが大切であることを学ぶことが出来ました。

なかでも、山口県のNPO法人キュアポートでの実践は、地域での就労支援を通して利用者のみならず地域にとっても必要な事業所であることが目標として掲げられていました。そこで働く利用者さんは自身の役割を持たせてことで病気や障害に左右されにくいとの報告もありました。このように地域へのアプローチが利用者さんのみならず地域の絆へとつながる可能性を知り、地域と共に活動していく重要性を感じました。



## 5. 分科会報告

### 第1分科会「退院支援システム構築に向けた実践と調査について」

座長 新潟医療福祉大学 横山 豊治

4つの演題で構成された第1分科会には、「退院支援システム構築に向けた実践と調査について」というタイトルが設けられた。

三原赤十字病院の柳迫三寛氏による「当院の退院支援におけるスクリーニングシステムの構築」では、平成15年に地域医療連携課を設置して以来、同病院で取り組んできた退院支援システムの構築について報告され、平成23年度では全入院患者に対する入院後1週間以内でのスクリーニング実施率が約90%にまで達したとのことであった。鹿児島大学附属病院地域医療支援センターの古田真美氏らによる「地域医療連携情報のデータベース化の現状報告」では、県の面積の約27%を島嶼（しょ）部が占めるという地勢的な背景もある中、県内医療機関の特性やソーシャルワーカーの知識を集約したデータベースを、県、県医師会、県看護協会、県MSW協会の協力を得ながらワーキンググループによって作成したことが報告され、経験年数や所属施設の違いによらず、新人ワーカーでも適切なSW実践ができるツールを目指しているとのことであった。東北文化学園大学の加藤由美氏による「本学会の

退院支援研究事業の概要と調査設計」では、診療報酬に退院調整加算が創設されて以来、看護師とMSWによって担われるようになってきた退院支援の実態を調べ、その業務の専門性を明らかにしようとする研究の

全体像と進捗状況について報告され、続く福岡医療福祉大学の大垣京子氏による「退院支援に関する調査～調査対象についての報告」では、同研究事業の調査対象として協力を得ている「連携室の連携の会」（平成14年発足。現在、福岡県内を中心とした191施設の連携室の実務者らで構成）の発足の経緯や活動状況が紹介された。

全体を通じて、病院内の部門間の連携と、地域における病院・施設間の連携を高める様々な取り組みが各地で行われている様子が伝わり、そこにMSWが深く関わっていることが印象づけられる分科会であった。



### 第2分科会「地域連携を進めるソーシャルワーク実践」

座長 岸和田市民病院 和田 光徳

第2分科会のキーワードは「地域」であった。演題1は、地域医療連携による自らの退院支援事例について、時代は変わってもソーシャルワークとして変わらない視点を、パールマンの理論から深く考察された。演題2は、精神障がい者作業所によるコミュニティサロンの活動から、チャレンジという利用者の能動的な物語を、地域の中で紡ぐ実践を報告いただいた。演題3は、同じく精神障がい者就労継続支援施設とグループホームの活動を通じて、利用者が不安を乗り越えていくための支援と支援者自身の不安、地域との関わりといった、福祉実践という交互作用の重要性を指摘しながらも、事業化と福祉支援活動の間にある福祉資本論的課題を、「脱福祉」という視点から考察された。

「地域」は、ミクロとマクロをつなぐメゾ領域といわれる。しかし、この3つの演題を通じて、ソーシャルワーク実践においては、「生活支援過程」の循環の中で、「地域」とはミクロであり、またマクロであるという、「地域」とは「つなぎ」の領域ではない、統合的実践の展開の場であることを実感した。



## 6. ワークショップ報告

### ワークショップ①

#### 「カンファレンスの実際」基本的な考え方と運営の工夫

講師 長谷 好記 先生(広島国際大学教授)

大会2日目のワークショップ①では、広島国際大学保健医療学部総合リハビリテーション学科教授長谷好記先生より、広島市立安佐市民病院在職時のカンファレンスを再現していただきながら、効率的・専門的なカンファレンスの方法について学びました。

無駄な時間を過ごしたとを感じるカンファレンスにならないために、3つのポイントを教えていただきました。

#### I. カンファレンスの目的

初回のカンファレンスでは患者の「ゴール設定」と「治療期間」、それぞれの部門で目的を共有する。

#### II. カンファレンスに関する基本的な考え方

参加者の職種は関係なく平等であり、自由に発言ができ、他人の発言は非難しない。

#### III. 運営上の工夫(5つのルール)

1. 一症例の制限時間を15分、原則1日3症例まで
2. 1枚の紙にまとめた資料を用意
3. 資料の読み上げを禁止
4. 治療方法を決める議論の場

5. 制限時間になったら、議論を打ち切り宿題とし2回目以降のカンファレンスでは、情報や現状確認のために「相互補完」を行います。特にMSWは、家族背



景や経済的状況を把握しており、必要な情報を的確にアセスメントしニーズを抽出する能力が必要です。

先生より、『MSWのMは何のM?』という質問を投げかけられました。いつも同じことしか質問しない無能(M)なMSWになるのか、患者さんに合せて個別ニーズを捉えるまともなMSWになるのか、この言葉は私たちMSWに期待していただいているからこそ投げかけられた言葉だと感じました。

報告者：福岡通信病院 図師 由里子

### ワークショップ②

#### 『福祉はまちづくり』一方向の支援から相互支援の地域づくりへ

講師 佐々木 哲二郎 先生(NPO法人ウイングかべ)

ワークショップ②では、NPO法人ウイングかべ(以下「ウイング」とする)の20年間の実践を通じてこの間のさまざまな変化についての考察をご講義いただいた。

現在、「ウイング」が運営するコミュニティサロン可笑屋(以下「可笑屋」とする)は、古民家を再生したもので、喫茶食堂や展示スペース等を設け、住民活動や交流の拠点となっている。「ウイング」の将来を話し合う場で、「働きたい、どういう思いでいるか知ってもらいたい」との想いも込めて可笑屋の改修費のための募金と演劇活動を始めた。そして完成した可笑屋の喫茶食堂で、当事者たちはサイフォンを使い、サービスの生産者、提供者としてコーヒーを入れる段階から魅せている。また当事者と市民との当たり前の関係が、生活者としての実感にも繋がっている。

「ウイング」では支援の対象者であった当事者が、市民として、提供者として、生活者として実感している。当事者と職員との関係は指導的ではなく共に担う協働こそが重要視されている。



「ウイング」の実践では、当事者、支援者、地域住民がお互いの繋がりのなかで、ニーズをサービスという形にし続けているのがすばらしいと思った。

報告者：安芸太田病院 有光 憲子

## 6. ワークショップ報告

### ワークショップ③

#### 支援のパワーアップを目指すアセスメント力 ～アセスメントの視点と注意点～

講師 竹内 一夫 先生(兵庫大学教授)

『アセスメント』という言葉を目にするにつけ「自分にはできているだろうか？」と反射的に自問自答してしまう。急性期病院のMSWとして退院支援室に配属となり3年目となる。早期転院・退院が求められる中、短期集中型の支援が必要不可欠である。

この度、ワークショップで上記の魅力的な演目に惹かれ受講することとした。竹内先生のお話は大変解かりやすくグループワークも織り交ぜながらの研修であった。中でも印象的だったのは、アセスメントの狙いと手順の中で、自らワーカーに支援を求めたのか、支援を求めさせられたのかを明らかにすること。クライアントに力がないかもしれない、その力を引き出す必要があるのではないか、という予備的共感。利用者に力があるのか、また本人や環境の強さがどれだけあるのかを慮るアセスメントにハッとした。

MSWが退院支援に携わることで支援の方向が変わる事がある。短期集中型支援の中で基本的視点は決してブレることなくアセスメントできるよう、今後も自己研鑽に努めていく必要があると改めて考える機会となった。



報告者：広島市民病院 岡副 真理子

### ワークショップ④

#### MSWの視点から見た経営的戦略

杉田先生の実践現場では、事業報告・事業計画を作成する際に、戦略マネジメントシステムであるBSC（バランス・スコアカード）を利用し、計画を立案の上、PDCAサイクルによって目標管理を行い、実績値・目標値データを比較し運営されている。今回BSC作成の流れについてご講義頂き、その過程のSWOT分析・クロス分析についてはグループワークを行った。特に印象的だったのは、MSWの業務が数値として見事に可視化されていたことだった。目標と結果が非常にクリアになり、組織が納得する成果を示しやすくなっていた。そしてMSWとして発言力を持ち、組織に生き残っていくためには、経営に関わっていくことが必要だとお話し頂いた。

多間に漏れず我が職場も平均在院日数の短縮や診療報酬改

講師 杉田 恵子 先生(医真会八尾総合病院MSW)

定の影響で、経営的側面を意識せざるを得ない。当然の事由でありながら、そこに戦略を持つという認識が薄かったのではないかと気づかされた。MSWの業務が診療報酬に反映されつつある今をチャンスと捉え、MSWとして経営的な視点からも成長していきたいと気持ちを新たにすることができた。



報告書：尼崎中央病院 林 久美子

## 7. 次年度大会開催地からのあいさつ

岩手へ おでんせ(いらっしゃい)!

日本医療ソーシャルワーク学会がまだ研究会の頃からほぼ毎回参加してきました。なぜかという、日頃の実践の中で考えていることや様々な苦勞を話した時、初めてあった人でも「そうそう」と思いを共有できる、この学会にはそれがあるからです。

さて、来年の第4回日本医療ソーシャルワーク学会は岩手県で開催します。

本学会には「東日本大震災の被災地・被災者支援を行う」、という活動方針があることから、被災地である岩手県で開催してほしいと村上会長から依頼があり、もとよりりっぱな大会を開催できる自信はありませんが、お引き受けすることとしました。

東日本大震災から約1年6カ月。被災された方々は不慣れた生活を送っています。働きたくても希望に合う仕事もなく、仮設住宅の入居期限までに住宅が確保できるのか、さまざまな不安を抱えています。医療・福祉の状況に目を転じると、被災した医療機関・介護保険事業所の再開のめどが立たず、利用ニーズに対応できない状況にあります。

岩手県医療ソーシャルワーカー協会 会長 山舘 幸雄

岩手学会では、例年通りMSW現任者に役立つようなワークショップ等の他に、被災地支援を考えるようなプログラムも取り入れたいと考えております。

もちろん、懇親会ではおいしい地酒を飲みながら、

三陸はじめ山海の幸を食べて大いに盛り上がりたいと思います(二次会、三次会では盛岡三大麺も!?)

なお、開催日時は2013年10月12日から14日の予定です。詳細は第2報でお伝えいたします。

大阪以西が多い本学会の会員の皆様には、岩手はかなり遠方かと思いますが、なんとかご都合をつけていただき、ご参加くださいますようよろしくお願いいたします。



## 8. 書籍紹介

医学書院出版サービスから「医療ソーシャルワーカーの力—患者と歩む専門職—」(定価:2,625円)を学会初の刊行物として発行しました。本書は、2006年6月から現在まで、月刊誌『病院』(医学書院発行)で連載中の「医療ソーシャルワーカーの働きを検証する」というタイトルの記事を再録・編集したものです。



事務局にて、学会員価格(2,000円)で販売しております。

お問い合わせは、事務局までお願いします。



## 9. 事務局からのお知らせ

### 【会費納入のお知らせ】

- 今年度(平成24年度)より、年会費が**5,000円**となっております。  
お間違えないよう、2012年12月31日までにお振り込みください。
- 過年度分の年会費納入がお済みでない方がいらっしゃいます。  
お急ぎお納めくださいますようお願いいたします。

郵便振込口座記号番号	：	01760-2-140617
加入者名	：	日本医療ソーシャルワーク学会
納入の際は、通信欄に「平成〇年年会費」とご記入ください。		

財政的に、厳しい状況での学会運営となっております。  
学会事業推進のため、皆様のご理解・ご協力よろしくをお願いいたします。

お問い合わせ先：日本医療ソーシャルワーク学会 事務局

## 編集後記

広島大会が終わり、3か月が過ぎようとしています。今年の大会には、北は北海道から南は鹿児島と幅広い地域の方にご参加いただきました。懇親会で、ある初参加の方から、ホームページのプログラムをみて参加を決め、「激務で身も心も擦り切れていたけど、この学会に参加してたくさん仲間ができたこと、初参加だけども来てよかった、元気になった」

と伺いました。このコメントで、学会準備と運営の疲れが吹き飛びました。私自身も力を抜いて仲間と語り、疲れた心身を癒すことができた2日間でした。学会に参加された皆様、ありがとうございます。

広報担当：高木 成美（広島市立広島市民病院）

発行	： 日本医療ソーシャルワーク学会 (The Japanese Society of Medical Social Work)
編集	： 日本医療ソーシャルワーク学会 広報担当
印刷	： 広島中央印刷株式会社
事務局	： 〒675-0195 加古川市平岡町新在家2301 兵庫大学 生涯福祉学部 社会福祉学科 加藤洋子研究室 TEL&FAX 079-427-9955
URL	： <a href="http://www.jsmsw.jp">http://www.jsmsw.jp</a>
E-mail	： <a href="mailto:jsmsw.secretariat@jsmsw.jp">jsmsw.secretariat@jsmsw.jp</a>